

# 新刊紹介

## 精神科學

廣島高等師範學校  
精神科學會編輯

餘りに多くの書籍に圍繞される我々は、そこに文化の精華を見るの感よりも、むしろ文化の冒瀆に面するの感がある。時と共に消え行くあまたの印刷物——わけても、月々に新な題目を興ありげな表装につつんで送り出す雑誌類を——我々は滅びんとする文化の表徴として見はしないか。少くとも文化の本質にとつては無意味なる殘滓と思ひばしないか。新聞に眼を通さざりし二日は、かへつて我々の心裡に新なる事の見覚る日である。それほごにまで所謂新聞雑誌は皮想なる些事に關はつてゐる。

しかも他方に於て我々の精神生活は日々新なる内容を産み新なる領域に進み入る創造の生活でなければならぬ。精神の世界に於ては、何よりも精進が求められる。舊に泥み、古きに執するは、たゞそれ形式に於ては尊きものであつても、その内容と精神に於ては惰力の生活であり緊張なき、思ひあがれる生活である。精神の世界に於ては、カントが道德の世界に就て語つた如く進歩にあらざれば退歩向上にあらざれば墮落の外はないのである。し

かも向上進歩は我々彼々の切實にまつ所が多い。肉體が榮養を外より受けるが如く精神の糧も外より來る事が多い。日々に新なる糧を我々に送るものは、それこそ眞の書籍雑誌である。

我々はここに於てあつて致なき幾多の書籍の灰となる日の清澄を思ふと共に、價値多き書籍のみ咲きはこる文化の園を思ひたい。今廣島高師の諸氏の努力のもとに「精神科學」を題する年四回の刊行物を見るに到つたのは、異色ある一本の花を我國の學界に送られし感がある。我々はその健かなる成長を心から祈ると共に、多くの人々より充分の愛撫のあらん事を願ふものである。

そこに集められた興味多き五編の論文の中、我々には中にも古典的な香り高き西博士の忠孝論に注目させられる。「生命自身は生命に純らにして到る所生命である。斯る生命はどのやうにも生きぬ。どのやうにか生きれば己れに背く、生きて生きざるもの、これ吾人の所謂生命以上の生命である。」「充れども虚しき」この太虚より發して博士は生命と法則の二つの實有の形相をさかれ、實は虚によつて成る所以を詳にせられる。虚の虚なるものは神なるが故に、虚に於て萬物が成るとは神に於て在るの所以、「故に山川草木悉皆成佛とも言ふ、」と云はれて、ここに宗教の位地を明にされる。しかも虚なるものに於て嚴たる上下の區別を、通じて一なる平等の原理とある事を示され、その立場から、忠と孝の深き

意味を説かれてゐる。全編を通じて深き知恵に満ち、我々に教へられる處少々でない。

今ここに全部にわたつての紹介は短き頁のよくする所ではない。普通と特殊の關係の問題に就て純粹事行とも云ふべき絶對的實在の立場より解決を試みられた河瀬氏の「個性化の原理」教育學の種々なる主張の要點とその批評を明快にもされた佐藤氏の「學としての教育學の性質」、最近の心理學上の「學習の法則に關する論争」を豊富なる動物實驗によつて論ぜられた久保博士の論文、及び岩井氏の「ウィーゼの關係學」の紹介等いづれも興味深きもの、直接に同書に就て見られん事を切望する。(高坂正顯)

(發行所 東京、牛込、イデヤ書院)  
一册金壹圓參拾錢、一年分金四圓)

## 寄贈雜誌書籍

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、觀想、内外教育評論、學校教育、教育時論、願慧、信濃教育、東亞之光教育學術會、都市教育、生理學研究、國民史語、教育論叢、佛教研究、講座

## 彙報

### 教育學研究例會

十月二十八日(木)午後六時半より學生集會所南室に於いて

中江藤樹とその教育 加藤精一君

### 哲學科茶話會

十月二十六日(水)午後七時より學生集會所南室に於いて

野助教授歡迎會を兼ねて

範疇としての空間 戸坂 潤君